

『元号という政府イベントに思う』

新元号「令和」は天平文化の最盛期に、ある役人の宴で詠まれた 32 首の歌の序文（万葉集に収録されています）に書かれた言葉の中に登場する漢字を組み合わせて作ったようです。しかし、万葉集の編者といわれる大伴家持は、今でいえば防衛省の高級官僚であり、多くの庶民は山上憶良の歌に表現されているように、格差社会の重税や防人の任務（兵役）に苦しんでいました。今回の日本政府のコメントでは“春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように一人ひとりが明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたいとの願いを込めた”とのことですが、万葉の時代は庶民の苦しみの上に、貴族の華やかな生活がなりたっていたことを思えば、筆者としては違和感を覚えます。

さて、そうした政府のショーアップ『元号』づくりの問題点はさておき、筆者にとっての元号問題は、学習の記憶です。そして、これはすでに多くの大人達が経験してきたことですが、元号の介在する日本史では、元号〇年が西暦何年に対応するかがすんなりわからず、受験学習ではしばしば立ち往生したものです。日本史と世界史の関連付けができない子供達が多いのはおそらく、歴史教科書の元号表記（西暦年号も併記されてはいますが・・・）も一因でしょう。

ちなみにかつて世界各地に王政が生き残っていた時代、中国や韓国、ベトナムでも元号を使っていましたが、今日、国をあげた政治ショーとして元号を決めたり、元号おじさん（元号を発表する官房長官）が次の首相候補だ！などといわれて頬をゆるめると人物が登場するのは日本だけの“政治遺産”です。というのも、世界がグローバル化し、同一の時間軸で、文化交流や交易が行われている現在、世界の常識は、西暦での年号表記だからです。

筆者は天皇制も元号制定も否定しませんが、民主主義社会ではさまざまな考え方が共存しますから、教育に関する取材を長年続けてきた者として、『国内には元号にこだわる人、元号に無関心な人、そして元号に批判的な人が混じりあい、意見を戦わせながら、現代の日本史を作り上げていっている』という自覚を、常に持ち続けたいと考えています。

ところで、こうした国家行事の仰々しさはさておき、令和元年以後の日本国内では、従来の学びの視点を一変するような教育変革が待ち受けています。教育改革というからには、良い方向に教育の未来が開けて欲しいというのは正直な気持ちですが、その内容をみると『富国強兵』に結び付きそうな取り組みが多いのに驚きます。こうした危うさ（教育行政や政府に従順な教育界の暴走）を食い止めるには、教育の課題を政府や現場まかせにせず、自らの目で、耳で、学びで、その経過の良し悪しを実感するという、“教育を他人任せにしない” 日常の視点も大切にしたいものです。『令和』が“冷和”にならないように、お互いに努力いたしましょう。